

〈巻頭言〉	1	2008年度NEARプロジェクト報告「石見の地域文化考察」について	4
第1回市民研究員定例研究会の報告	2	NEARセンター研究員・平成21年度新規科研費	
第2回市民研究員定例研究会・NEARセンター		プロジェクトの紹介	5
交流の集い（松江会場）	2	NEARセンター研究員の研究活動④	6
第18回日韓・日朝交流史研究会	3	NEARセンター短信	7
第2回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会報告	4		

石川県旧富来町をたずねて

NEARセンター長 井上 治

この春学期は、久々に国内の事情に興味を覚え、日本海に面する石川県の旧富来町に調査に出かけた。旧富来町は、平成の大合併で平成17年に隣町の志賀町と一緒になるまでは、「渤海国交流事業」を積極的に推進してきたところである。渤海国は、698年から926年まで、現在の中国東北地方から朝鮮半島北部、ロシア極東の沿海州にまたがって存在し、日本との間でさかんな使者の交換をおこなった王国である。この使者が旧富来町にある福浦港を利用したという史実に基づき、地域の誇るべき歴史を町民に知ってもらい、かつ町おこしにつなげようと、平成11年の「渤海国交流研究センター」の設立を皮切りに、大小規模の研究・対話集会を幾度も開催し、その成果を立派な単行本にまとめて世に問い、中国東北地方への町民ツアーを実施した実績をもつ町である。その町をぜひ一度見てみたい、当時その事業に参画した方々の話を聞きたいという気持ちがあった。列車とバスを乗り継いで降り立った富来も、地元の歴史に通じる先生にご案内いただいた福浦港も、寂れているとの印象を持った。ご多分に漏れず少子高齢化の問題を抱えている。島根県立大学のある浜田にもよく似た光景と状況がある。このような町がどうやって大事業を推進しえたのか、不思議で仕方なかった。当地では、旧富来町議をつとめた方、旧富来町役場で事業を担当されたお二方や富来図書館員の方と親しくお話しさせていただいた。その中でわかったことは、「渤海国交流事業」

が、隣町の志賀原発2号機に係る電源立地地域対策交付金を利用して実施された部分が大いということであった。隣町に立つ原発と引き替えに、地域の歴史の掘り起こしを企図したことに純粋に心動かされた。しかし、平成17年をもって交流事業は一段落したということで、合併後の志賀町では「渤海国交流事業」は休止状態にある。島根県にも「環日本海松江国際交流会議」という取り組みがあり、平成7年には渤海国もテーマになった。しかしこれまた休止状態にある。現在の地方自治体がおかれている状況からすれば、地域文化よりも優先的に振興を図るべき分野があることはわかってはいるが、一抹の寂しさを覚えずにはいられない。ただ、旧富来町に消えずに残る「渤海国」への思いがあることもわかった。上にあげた旧町議の方は、かつての事業に関わった金沢にある大学の先生と連絡を取り続け、今年はその先生が学生を引き連れてセミナーを開いたという。また旧町議の方は個人的に中国東北地方を再訪したとの知らせが届いた。渤海国との平和的交流の史実が、富来ならびに現志賀町の地域アイデンティティを形成し、少子高齢化の中、地域の活力源たるべき元気な高齢者の興味を生き生きと海の向こうにつなげていける素地があることはうらやましい。われわれセンターも地域住民とともに、平和な北東アジアの歴史を核にした地域づくりの可能性を模索しなければならないことを痛感する。

第1回市民研究員定例研究会の報告

平成21年6月13日（土）、今年度最初の市民研究員定例研究会が本学交流センターのコンベンションホールにて開催されました。広々とした会場に、コの字で組まれた机が設営され、かつ大学院生席の部分はコの字の一片を二重にする形になっていました。そのような大々的な会場の中は、市民研究員の皆様22名をはじめとして、大学院生、NEARセンター研究員が席を譲り合いながら着席するほどの活況で、第一回研究会が始まりました。今年をはじめて研究員になった私が、柄にもなくどきどきしていたのですから、今回初めて市民研究員に仲間入りされた方や大学院生の中にも、新しい始まりに臨んで私同様に緊張された方がいらっしまったかもしれません。

NEARセンター長井上治先生のあいさつからはじまり、続いて市民研究員の皆様から研究テーマなどを含めた自己紹介をしていただきました。当日、ご参集いただいた市民研究員の方々から、それぞれの研究の背景や動機を限られた時間ではありましたが伺うことができました。相当の研究歴をお持ちの市民研究員の方もいらっしまったら、ずっと問題関心を温めてこられてこれから新しい研究に挑もうとされている市民研究員の方もいらっしまったら、私自身も、研究員の一員としてフレッシュな気分で皆様との共同研究に取り組みたいと心を新たにいたしました。

そして次に、井上治先生から「古代北東アジアの交流と地域振興—石川県旧富来町の取組—」と題したご講演をいただきました。まず、研究対象としての「渤海国」の魅力を歴史的経緯に沿って紹介していただきました。「渤海国」については、韓国・北朝鮮、中国、日本、ロシアで、それぞれ異なった位置づけがなされてきたこと、「渤海史」をめぐる国家間の対立が発生してきたこと、これらの経緯をダイジェストで門外漢の研究員にもわかりやすく丁寧に教えていただきました。そして、「渤海国」をめぐる発生するその他さまざまな対立（たとえば、国家⇔民間、中央⇔地方、そして、特に学術領域における御用学問⇔自立した学界）を超えた「渤海国史」の構想をお示しい

ただいた上で、石川県富来町の取組を「小さな町の大成果」の事例としてご紹介いただきました。私たちの浜田市も先例の富来町に学ぶ点があるはずで、今後の研究・活動へのサジェスションをお示しいただきました。

講演会の後は、市民研究員の皆様、大学院生諸氏、NEAR研究員によるフリートークの時間が設けられました。引っ込み思案な大学院生を、市民研究員の方が議論に誘ってくださるような場面もあったようです。広い会場の中では、あちこちに歓談の小さな輪ができて、研究交流に向けた出会いの萌芽がありました。その後、共同研究の計画などが続々と報告されてきております。それぞれの研究の今後の発展が楽しみです。（研究員 魁生由美子）

第2回市民研究員定例研究会・NEARセンター交流の集い(松江会場)

2009年7月4日、「NEARセンター交流の集い・第2回市民研究員定例研究会」が、島根県立大学松江キャンパスにて開催された。NEARセンターでは、昨年度より「市民とつくる北東アジア交流の集い」と題する集会を年2回松江にて実施し、センターの活動内容や研究員について紹介すると同時に、市民研究員制度について県東部にても広く周知することを企図している。このたびの会合は、この「交流の集い」を、通常島根県立大学浜田キャンパスにて行っている市民研究員定例研究会とも兼ねたかたちで、松江市にて開催したものである。NEARセンターからは、井上治センター長、福原裕二副センター長、魁生由美子、佐藤壮、坂部晶子の各研究員、鄭世桓、新井健一郎の各助手、事務局研究企画課より島田成毅課長、江角正俊主任が参加した。NEARセンターからのメンバーにたいして市民の方のご参加は5名にとどまったが、古参の市民研究員の方や今年度初めて登録いただいた方、また一般の市民の方のご参加もあり、和気藹々とした会合であった。

このたびの会では、はじめに井上治センター長よりあいさつがあり、交流の集いを松江で開催することの意義について説明が行われた。その後、魁生由美子研究員より、「くらしの福祉、東アジアモデル——日韓の市民的パートナーシップと新しい福祉文化」と題して講演が行われた。講演で

は、日本の福祉制度の谷間的存在であった在日コリアン高齢者にたいする福祉サービスは、市民による草の根的取り組みから始められた点が指摘され、「くらしの福祉」という領域では、個人の生活史を踏まえた衣食住、たとえば食の嗜好性への気配りといったひじょうに微細な配慮が重要となってくる点が注目された。そうしたなかユニークな取り組みを行っている関西の高齢者ケア施設「尼崎喜楽苑」や「園田苑」の活動が紹介された。従来型の福祉政策では、個人のプライバシーを重視した個室化への流れが見られるなかで、「園田苑」の活動方針では、個室生活を一度もおくったことのない日本や韓国など東アジアの高齢者にとって、日常生活の習慣を大切にしたい集団生活という方向性をとっているという事例が紹介され、「高齢者福祉の東アジアモデル」として提起された。魁生研究員は本年度よりNEARセンター研究員に就任されており、講演はその研究内容の紹介も兼ねるものであった。現在取り組んでおられる新しいテーマについて、島根県や関西、韓国で行われたばかりのホットな現地調査によるデータも交えてお話しいただいた。少人数の集まりということもあって、講演および参加したセンター研究員の関心紹介にたいしても率直な質疑応答と意見交換が行われた。(研究員 坂部晶子)

第18回日韓・日朝交流史研究会

2009年7月3日(金)、交流センター・コンベンションホールにて、第18回日韓・日朝交流史研究会を開催した。今回の研究会は、本会による定例の研究報告会という意味合いだけでなく、来年度以降、本会が発展的に展開を遂げるべく組織した日韓研究者による学術会議「竹島／独島研究会」の初会合を含意して開いた。従って、研究会には本会メンバー及び韓国人研究者4名を含む「竹島／独島研究会」メンバーが一堂に介し、広く有識者や市民の方々の意見を拾うことを目的に研究会はシンポジウム形式とし、研究の方向性を決定づける問題の所在を明確なものとするために3セッション立てで構成した。「学術研究としての竹島／独島問題の定立のために—領有権問題をめぐる堂々めぐりを超えて—」と題して行ったこ

のシンポジウムの報告進行は以下の通りである。

◎第1セッション「竹島／独島研究の新たな視点」

- ・福原裕二(島根県立大学NEARセンター研究員)「竹島／独島研究における第三の視点」
- ・文竣映(韓国・釜山大学校法学専門大学院助教授)「独島／竹島に対する法的フレームの再検討」

◎第2セッション「竹島／独島領有権紛争のフレームワーク」

- ・朴昶建(韓国・国民大学校日本学研究所専任研究委員)「領有権問題を取り巻く韓日葛藤の拡散」
- ・佐藤壮(島根県立大学NEARセンター研究員)「領有権問題における不可分性：竹島／独島をめぐる日韓関係を事例に」

◎第3セッション「竹島／独島をめぐる問題の抽出」

- ・森須和男(島根県立大学NEARセンター市民研究員)「市民から見た鬱陵島と竹島／独島」
- ・金秀姫(韓国・金泉大学講師)「独島／竹島漁場における日本式漁業の伝播過程」

井上治NEARセンター長による「開会のあいさつ」、李盛煥韓国・啓明大学校国際学部教授による「『竹島／独島研究会』総括責任者あいさつ」に続き、本会代表の福原が、竹島／独島研究において一定の認識と目的を共有し合った日韓の若手研究者が集い、共同研究を進めていくことの意義を中心とする開催趣旨説明を行い、シンポジウムの幕が開いた。その後、それぞれのセッションの研究報告が行われ、セッションごとに活発な質疑応答が展開された。報告要旨は以下の通りである。

第1セッションの福原は、既存研究の問題点と研究視点・観点の偏りを指摘した上で、竹島／独島という「存在」に影響を受けている地域・人々、またこの「存在」に対して切実な利害関係を有していながら、等閑に付されてきた地域・人々を意識した視点の確立の必要性について問題提起した。文は、韓国歴史学界における新たな竹島／独島研究の潮流が存在することを指摘し、この研究群を丹念に追うことで、韓国においても領有権問題を相対視する研究状況が現出しつつあることについて紹介した。

第2セッションの朴は、国家の対外行動予測において国際体制内の他国の政治行為に対する反応よりは過去の政治的行為がより良い指標になるとする、リチャードソンの「作用・反作用」モデルの竹島／独島問題をめぐる日韓関係の説明可能性

について議論した。佐藤は、冷戦後東アジアの安全保障、日本のアイデンティティと安全保障、領有権問題に対する国際政治学の学術的蓄積について有機的に論じた上で、領土問題が軍事的対立に発展する事例は存外少ないこと、「領土」に含意される様々な価値について指摘した。

第3セッションの森須は、在野の研究者として着実に進めてきた、天保竹嶋一件を中心とする鬱陵島及び竹島／独島にまつわる研究成果の紹介を中心に、領有権問題とは異質ながら検討を有する多くの史的問題の存在を明らかにした。金は、鬱陵島における近代漁業発展史を丹念に辿ることで、そこでの日本式漁業の伝播過程と生業形態に与えた衝撃について独自の考察を施した。

(研究員 福原裕二)

第2回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会報告

2009年6月23日、第2回「北東アジアの交錯するアイデンティティの諸相」研究会が開催された。今回は北東アジアの超域現象を分析した先行研究の書評会という形式をとり、江口伸吾准教授が、アジア政経学会監修／高原明生・田村慶子・佐藤幸人編著『現代アジア研究1／越境』（慶應義塾大学出版会、2008年）のレビューをおこなった。本書は、グローバル化の只中であって「越境」がアジアの今日的な時代状況を最もよく表す事象であるとし、グローバリズム、リージョナリズム、ナショナリズムの3つのベクトルが絡み合うものとしてアジアの越境事象を多角的に描き出している。とくに、アジア地域に広がるネットワークやフレームワークの現状と発展の趨勢を6つの問題領域（Iカネ・モノ・サービスの越境、II環境・衛生問題の越境、III犯罪・テロの越境、IV人の越境、V文化・情報の越境、VI価値とアイデンティティの越境）にわけて検証し、アジアにおけるコミュニティ形成の可能性を考察する意欲作である。江口准教授は序章及び17の章の内容報告に続いて論点を析出し、その論点に沿う形で議論が白熱した。(1) ネットワーク（越境する主体間のつながりを促進あるいは規制する）、フレームワーク（国家が構成する合議体あるいは制度）、コミュニティ（価値規範やアイデンティティを共

有する）は相互にどのような関係性にあり、越境現象の多様性を分析する枠組みとしてどこまで有効か、(2) 増大する越境事象への国際的・地域的な取り組みが内政不干渉原則と抵触する可能性（環境問題、感染症対策、犯罪やテロの取り締まりなど）が出てきており、興隆するナショナリズムへの対処・国家の位置づけと役割の変容・主権概念の再検討といった新たな課題が生まれているのではないか、(3) グローバル化や越境現象に触発された新たなアイデンティティ形成の契機がアジアに生まれるという本書の議論に対して、アイデンティティの認識の多様性や民族自決主義の浸透を特徴とするアジアの現状を見れば、必ずしも‘Asian’ アイデンティティの形成に収斂するわけではないのではないか、などの諸点は今後の本研究会を貫く骨太の論点として繰り返し検討する必要があるとの印象を持った。（研究員 佐藤壮）

2008年度NEARプロジェクト報告 「石見の地域文化考察」について

2008年度の「NEAR地域貢献プロジェクト」研究を実施した。当初計画では、対象分野として〔神楽〕〔文学〕〔映画〕〔演劇〕を設定した。

〔神楽〕は、この地域では最も活発な活動が日常的に行われており、地域住民にも幅広く親しまれている「芸能」でもある。他の文化活動が一見停滞しているように見受けられる中で、「石見神楽」だけは突出して元気がいい。特に、幼少期の子どもたちにも受け入れられている点で、将来性も充分に見込まれる。その魅力の源は何か、何故これほどの共感を得られるのか、歴史的経緯を含めて探りたいと考えた。

〔文学〕のジャンルは広いが、今回は柿本人麻呂に絞ることで、その作品と人となり、そして地域との関連性について、共同研究者として豊田有恒教授（当時）の分析を基にした考察を試みた。

〔映画〕については、特に昨年（2008年）は益田市の常設映画館が閉鎖された為、ついに石見地域には映画館が一館も無いという状態に至ってしまった。人口が減少し商業的に成り立たないというのが最大の理由であるのだが、果たして文化的に〔映画〕はこの地域で今後継続し得るのだろうか。その打開の方向性を見出す手段を、「映画文

化政策」にも造詣の深い映画監督の山田洋次氏の考えを取材しつつ、模索してみたいと考えた。

〔演劇〕については、この地域で長年地域演劇の創造に携わり、また「島村抱月」という地域が産んだ偉大な演劇人を研究されてきた岩町功氏に、その経緯と現状を述べてもらいつつ、将来への展望を示したいと考えた。

今回の調査・研究の特性として、《映像》を用いた記録と解析と推考という方法を重視した。元々《映像》は、動的な状況や言語など『時間経過』によってその本旨を伝達する事象を記録し解析するには最も適した媒体である。〔神楽〕や〔映画〕〔演劇〕といった明らかに《動的かつ時間的》ジャンルは勿論だが、〔文学〕においても、言語解説によって現在から創作された過去へと遡り、その様子を映像化することで、受け止める側の想像性を喚起させ得るという点で《映像》が持つ力を発揮でき、文章による記述と併せれば、その効果は倍加すると考えたからである。

(総合政策学部教授 瓜生忠久)

NEARセンター研究員・平成21年度新規科研費プロジェクトの紹介

●「中国都市基層社会の自治に関する調査研究—居民委員会を中心として」

(基盤B (海外)・研究代表: 唐燕霞)

本研究は中国都市部の「社区」(コミュニティ)に焦点を当て、国家と社会の関係の再編過程における「社区居民委員会」の実態調査を通じて、都市部における住民自治のあり方と、それが中国社会の支配構造にもたらす影響を社会学と政治学のアプローチから実証的に分析するものである。

本研究では、本研究組織が江蘇省、北京市、山東省の居民委员会主任の選挙や住民自治のあり方を研究してきたことを踏まえて、中国都市部の基層社会が国家と社会の再構築の過程に置かれていることを考察する。すなわち、一方において、国家は「単位」制度の崩壊によって弱体化した党の影響力を強化すると共に、社区自治を推進しようとしている。他方、「業主委員会」などの民間アクターの出現によって、住民による自治の動きが活発化している。「国家」と「社会」の双方から

の影響を受けている「社区居民委員会」に対する調査研究を通して、中国における自治のあり方と可能性を考察することが本研究の目的である。調査地は青島市、瀋陽市、上海市と武漢市を選ぶ。これらの「自治モデル」の代表的な地域の比較研究を通して、住民自治のあり方をより総合的に接近しようとしている。

さらに、社区自治は「単位」社会や伝統的な鄉村社会の自治が蓄積されてきた資源を共有することができると考えられる。したがって、本研究は、これらの研究成果を踏まえながら、「国家」と「社会」の間にある「半国家・半社会」(毛里和子)、あるいは「第三領域」の視点から住民自治の可能性を歴史的な文脈の中で捉え直し、現代中国の都市基層社会の変化をより包括的、総合的に分析し、社会変容の方向性を展望しようとする。 (研究員 唐燕霞)

●「虚妄と切実の間—改革開放以降の中国社会における欲望とイデオロギーとの関係に関する考察—」 (若手B・研究代表: 王鳳)

本研究課題は、文献研究及び北京市をフィールドに実施するライフヒストリー調査に基づき、文化装置として人々の意識に作用する要素としての「新イデオロギー」(市場価値の称揚による「国家・民族」物語の脱構築や消費主義神話を内実とする)と現実の中国社会に生きる生活者の「欲望」との関係性並びに「距離」の解明を試みるものである。

(1) 目的・方法

本研究課題では、改革開放以降の30年間のプロセスを、大きくは80年代と90年代以降とに時代区分し、それぞれのイデオロギー変容の思想史的意味の再整理を踏まえつつ、現実を生きる生活者の意識は単に時代精神の受け手としてではなく、「欲望」を媒介にして多様な心持ちを有しており、それゆえ文化装置としての「新イデオロギー」と「現実」とのはざまに揺れ動く「距離」の析出を行うものとして構想している。

そのために、文献研究と聞き取り調査との二つの研究方法を採用している。中国社会におけるイデオロギーの変容を考察するためには、第一に、政治社会の世俗化過程を経て、消費主義へと移行

する価値観の変容の様相を最も取り上げている中国共産党青年機関雑誌『中国青年』（1978-2008）を素材に、通時的なイデオロギーの変化の軌跡を辿る。第二に、これを補完する二次資料として、文学研究、カルチュラル・スタディーズ、価値観研究などの既存のイデオロギーを対象にした研究論文を利用する。次いで、イデオロギーと生活者の欲望との関係を考察するにおいては、基礎データとして2005年から続いている北京での個人のライフストーリーへの聞き取り調査の結果を用いる。

（2） 結果・結論

本研究課題では、現代の中国社会を覆うイデオロギーの交錯した状況を検証し、聞き取り調査の結果分析を通して、政治社会における個人が主体性なく一方的に抑圧された存在でないのと同様に、「新イデオロギー」時代と一般に規定された状況の中で生を営む個人も、単に虚妄な欲望に支配された主体性のない存在ではないことが析出されよう。

かかる研究結果に基づき、多発する社会問題の発生を個人の心情や意識の問題に収斂させ、新たな価値システムの構築が問題の対処法として有効だとする論調に疑義を呈し、その上で欲望と欲望とが衝突することを防ぐ規範や制度の確立が急務であると提言したい。（助手 王鳳）

NEARセンター研究員の 研究活動④

◀センター研究員の活動をリレー連載で紹介しています。今号は李曉東研究員にご執筆いただきました(編集部)▶

近代中国の立憲思想をテーマに研究を行ってきた筆者は、近年、現代中国における「自治」のあり方に関心を持つようになり、ここ数年、共同研究で中国各地でフィールドワークをしてきた。現在、中国の都市部の基層社会で進められている社区（コミュニティ）建設に注目している。社区建設は一方、「国家」にとって、国家の直接支配下にあった従来の「単位社会」に取って代える新たな統治方式の模索である。他方、「社会」からすれば、市場経済の深化により、都市部の社区における「私」や、権利意識の成長が「下」からの自治の実現につながる可能性がある。その場合、社

区における「居民委員会」が鍵を握っていると思われる。なぜなら、居民委員会は基層社会の自治組織として位置づけられながら、実質的に「国家」の出先機構の役割を果たしており、「国家」と「社会」の結節点にあり、「第三領域」の性格をもっているからである。居民委員会は、区内の行政面の仕事を押しつけられて上級の行政機関の評価を受けなければならない一方、居民委員会が区内の住民投票によって選出されたものであるため、住民の監督と評価をも受けなければならないのである。社区建設は今後、基層社会まで浸透した国家と、社区の住民、そして、居民委員会三者の緊張と協力の関係のなかで展開されていくと予想される。自治を考える場合、国家の強い影響下にある居民委員会が住民の利益を代表し国家から相対的に自立したアクターになるために、住民の支持が不可欠である。そして、住民の参加意識を高めるために、住民たちが自己アイデンティファイできるような社区を創出することが重要である。社区アイデンティティをいかに創出するかは中国における自治を考えるときの重要な課題だと考えている。

筆者が取り組んでいるもう一つのテーマは、思想史における「読み換え」の問題である。今まで、19世紀末期の東アジアにおける近代の中、日、韓諸国の知識人たちがどのように儒教を中心とした伝統を生かしながら「近代」を受容し、また、「近代」を借りて儒教思想をはじめとした伝統を読み換えたか、という課題に取り組んできた。このような北東アジアの知識人たちの「近代」と「伝統」とに対する「読み換え」を考察することによって、「近代」と伝統に対する知識人たちの理解の仕方を明らかにし、彼らの「読み換え」のなかにどのような「近代」の可能性をもつかについて考えてきた。

しかし、儒教に対する「読み換え」は決して近代に始まったものではない。儒教の歴史自体はそもそも「読み換え」の歴史だと言ってよい。例えば、明末清初の黄宗羲の儒教に対する「読み換え」は近代中国啓蒙思想の形成の重要な思想的資源となり、荻生徂徠の儒教に対する「読み換え」には「近代」の契機を内包させていた。今後は、「近代」という思想的資源を持ち合わせていなかった北東アジアにおける近代以前の知識人たちが儒教を「読み換え」る際に、「近代」の地平からすれ

ば儒教と同じように「伝統」に属する法家や、道教、仏教などの思想的資源をどのように動員したのか、という課題を追究して、「読み換え」に関する研究を深めていきたい。（研究員 李暁東）

NEARセンター短信

●春学期の調査・報告活動

○井上治研究員

- ・市民研究員と三隅町三浦尚氏訪問（4月11・14日）
- ・日本モンゴル学会（東北大学、5月16日）
- ・浜田市近辺にて、浜田地域振興研究会に関する現地調査（5月21・22日、6月1・5・6・8・15・18・20・22・25・26・27・29日）
- ・科研（基盤A：分担）「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究」集会参加（京都：大谷大学、5月23日）
- ・石川県志賀町訪問調査（5月24～26日）
- ・市民研究員定例研究会にて報告（6月13日）
- ・くにびき学園講義（6月19日）
- ・トヨタ財団助成「新疆民間のモンゴル語伝統文書の保存と集成」による画像資料保存に関する出張（東京、7月29～30日）
- ・科研（基盤B：代表）「モンゴルの白樺樹皮文献と白樺樹皮文化に関する調査研究」による中国内モンゴル自治区現地調査（8月3日～9月7日）

○江口伸吾研究員

- ・島根県立大学及び松江テルサ（NEARカレッジ）にて、「現代中国における格差と農村」と題する報告（7月14・15日）
- ・中国（北京市・山東省）にて、科研基盤C「現代中国農村の「党一政一民」関係—アクターからみた村民自治の政治社会構造分析—」（代表：江口伸吾）の調査（7月27日～8月2日）
- ・中国（瀋陽市）にて、科研基盤B「中国都市基層社会の自治に関する調査研究」（代表：唐燕霞）のインタビュー調査（8月3～7日）
- ・中国（北京・昆明）にて、NEARプロジェクト「『単位』人から『社区』人へ—中国都市部における「社区」アイデンティティの創出と住民自治のあり方」（代表：唐燕霞）の調査（8月8日～8月17日）

- ・GPフォーラム「北東アジアにおける英語使用環境の構築」におけるシンポジウム「英語とICTを使ったコラボラティブな教育の課題と展望」にてパネリストとして参加（9月19日）

○魁生由美子研究員

- ・韓国忠清南道女性政策開発院10周年記念学術大会にて「日本の老人虐待」と題する報告（2009年6月4日）
- ・NEARセンター交流の集い・第2回市民研究員定例研究会にて「くらしの福祉、東アジアモデル—日韓の市民的パートナーシップと新しい福祉文化—」と題する報告（2009年7月4日）
- ・大阪都市研究会（科学研究費補助金基盤研究(B)「「都心回帰」時代における大都市の構造変容—大阪市を事例として—」（同志社大学・社会学部・鯉坂学）」チーム）による韓国都市調査に参加（2009年8月19日～23日）
- ・韓国啓明大学校の日中韓シンポジウムにて「社会福祉の東アジアモデル—福祉社会をつくる日韓の市民的連帯—」と題する報告（2009年9月22日）

○坂部晶子研究員

- ・浜田近辺にて、浜田地域振興研究に関わる調査（6月1、5、6、8、15、18、26、27、29日）。
- ・浜田および松江（NEARカレッジ）にて「植民地経験の語り得なさ—国境の街における記憶の重層性」と題する講義（6月30日・7月1日）。
- ・中国北京、黒竜江、内蒙古自治区にて、植民地経験と博物館展示に関する現地調査（8月5日～25日）。
- ・台湾・国立暨南国際大学にて、Critical East Asian Studies Forum: International Workshop on Subjectivity of the Otherに参加、「植民地経験の語りの現場—記憶の重層性をめぐって（讲述殖民地经历的现场 —关于记忆的多层性）」と題する報告（8月27日～9月1日）。

○唐燕霞研究員

- ・日中社会学会第21回全国大会にて、シンポジウム「日中社会学叢書の成果・課題・展望」（書評セッション）での報告（6月7日）
- ・NEARカレッジ前期講座「辺境と底辺から見る中国」において、「中国の底辺階層—都市部の貧困層を中心として」と題する講義（7月7日松江、8日浜田）
- ・中国（北京・青島・煙台・瀋陽）にて、科研費

プロジェクト「中国都市基層社会の自治に関する調査研究」のインタビュー調査の実施（7月27日～8月7日）

- ・中国（北京・昆明）にて、NEARプロジェクト「『単位』人から『社区』人へ—中国都市部における「社区」アイデンティティの創出と住民自治のあり方」のインタビュー調査の実施（8月8日～8月18日）
- ・韓国啓明大学校（啓明大学校主催、中国社会科学院日本研究所・山東省社会科学院と島根県立大学が共催の国際シンポジウム「低炭素・グリーン成長」）にて、「中国に進出した日系企業の労使関係」と題する報告（9月22日）

○林裕明研究員

- ・比較経済体制研究会例会（6月20日、於 京都大学）にて報告。タイトルは、“Russian Labour Market under the Global Economic Crisis”
- ・山陰経済ウィークリー2009年7月28日号にインタビュー記事が掲載。
- ・GPフォーラム「北東アジアにおける英語使用環境の構築」におけるシンポジウム「英語とICTを使ったコラボラティブな教育の課題と展望」にてパネリストとして参加（9月19日）
- ・比較経済体制研究会第28回夏期研究大会第2セッション「自由論題」にて座長（9月25日）。
- ・国際会議“the Global Shock Wave”（9月26日、於 京都大学）にて報告。タイトルは”Social Impact of Crisis in Russia”

○福原裕二研究員

- ・韓国外国語大学（ソウル：韓国日語日文学会）にて、「私の竹島／独島研究」と題する基調講演（4月18日）。
- ・島根県立大学（日韓・日朝交流史研究会）にて、「竹島／独島研究における第三の視点」と題する報告（7月3日）。
- ・松江（日韓親善協会）にて、「『真の日韓交流』とは何か」と題する講演（7月14日）。
- ・『核拡散問題とアジア—核抑止論を超えて』（国際書院刊、第3章を担当）を刊行（7月21日）。
- ・韓国（ソウル、大田、大邱、安東、蔚山、鬱陵島）にて科研等に関わる資料収集、現地調査（8月2日～31日）。
- ・韓国（ソウル：東北アジア財団国際学術会議）にて、「独島研究における第三の観点」と題す

る報告（8月6日～7日）。

○李曉東研究員

- ・第8回日本・韓国政治思想学会国際学術会議「伝統と革命、政治思想の課題と挑戦」に参加し、「中国近代知識人における伝統と革命」という題で報告した。（7月4日～5日）
- ・中国北京、青島、煙台、瀋陽、昆明各地の都市社区に関する調査を実施（7月29日～8月19日）
- ・横浜国立大学で開催されたシンポジウム“On Liberty and Asia”で、“Yan Fu's Idea of Liberty”という題で報告した。（9月3日～4日）
- ・横浜国立大学で開催されたワークショップ“Transformation of Liberalism and the New Scheme Integration: Organic View from the Fin-de-siecle to the Interwar Period Examined”で、“The Characteristics of Liberalism in Modern China: Yan Fu's acceptance to J.S. Mill and J.R. Seeley”という題で報告した。（9月26日）

●受賞

- 坂部晶子研究員が出版した『「満洲」経験の社会学—植民地の記憶のかたち』（世界思想社、2008年）が現代風俗研究会より第18回橋本峰雄賞を受賞（2008年12月）。

●NEARセンターin「書評」

- 福原裕二研究員が刊行した『核拡散問題とアジア—核抑止論を超えて』（吉村慎太郎・飯塚央子編、国際書院、2009年）が『中国新聞』（2009年8月2日付「話題の一冊」欄）の書評に掲載。
- 坂部晶子研究員による『「満洲」経験の社会学—植民地の記憶のかたち』（世界思想社、2008年）の書評（評者、猪股祐介氏）が『ソシオロジ』第165号（2009年5月）に掲載。同書の書評（評者、野上元氏）が『社会学評論』第237号（2009年6月）に掲載。

NEAR News 第33号

2009年9月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail:near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ:http://www.u-shimane.ac.jp/near/main.htm